

輪之内の西松さん、ぎふ清流GAP取得



育苗ハウスで、イチゴの苗を手入れする西松勝典さん＝輪之内町楡俣

次世代へつなぐ
イチゴ作り奮闘



「ぎふ清流GAP」の認証証書を手にする西松さん＝同

銀行員から就農 「持続可能な農業」重視

輪之内町楡俣のイチゴ農家、西松勝典さん(59)が、食品の安全や環境保全などの基準をクリアした生産者を県が認証する制度「ぎふ清流GAP」を取得した。清流GAP取得は、JAにしみの管内で51軒あるイチゴ農家で初めて。銀行員時代の経験を生かして環境に優しいイチゴ作りに奮闘しており、「GAPの認知度を高めながら、さらに付加価値を付けておいしいイチゴを届けたい」と意気込んでいる。(武藤直子)

西松さんは3年前、町の土地改良事業で農地が整備されたことをきっかけに、「祖父の代から受け継ぐ土地を人任せにしたくない」と、34年間勤めた銀行を退職し、就農を決意。全国農業協同組合連合会岐阜本部(JA全農岐阜)の研修を受け、農法人「令和農園」を設立した。

イチゴを選んだのは、値崩れが少ないため収益力が高く、「嫌いな人も少ない」から。パック詰めなど手作業が多いことから大規模農業者が参入しにくいことも後押しした。栽培の仕組みを事業として確立できれば次代への継承もしやすいため農業法

「イチゴ栽培は初めてのことで、諦めかけたこともあった」と明かす西松さん。銀行員時代に実践していた書類作成術やPDCAサイクルが、生産工程のリスクを洗い出して分析するGAP取得に役立ったという。目標は「次に続く若い就農者が出てきてくれること。そのためにも、さらに高レベルな農業を実践していきたい」と先を見据える。

「持続可能な農業」も重視している。農薬を極力減らしているほか、農薬を用いる場合も、希釈して安全に地下に浸透させる自作の設備槽を活用する。余った肥料を含んだ水を流す排水槽もハウスの外側に設け、クレソンや菜花を栽培して有効活用している。